

広島俳句倶楽部

令和二年十二月作品集

秋の旅

暁子

十月の下旬、北海道を訪れました。紅葉（黄葉）の真ただ中で、被線がどこまでも続く十勝地方、丘陵の美しい富良野など大地の自然の美しさに圧倒されました。そして何よりも心を動かされたのは、河川工事のされてない川の数々と水辺の竹まいの素晴らしさで、ありのままの自然の豊かさを、あらためて認識しました。

時節柄、規制の多い旅でしたが、心を解きほぐしてくれました。また、ちやうど特別作品掲載の順番で、思い出を俳句として残せることを嬉しく思っています。

白樺の黄葉や十勝晴れ渡り

山粧ふ鈴をつけたる牧の牛

天窓に紅葉の見ゆる厩舎かな

十月の連峰いま昏れんとす

アイヌ語のわらべ唄聞く秋の旅

霧晴れて池塘に映る岳樺

麦芽吹く噴煙薄き十勝岳

蝦夷栗鼠の跳ねる唐松落葉かな

木枯に見え隠れして富良野線

落葉して白樺の空近くなる

昼月のところまで飛び稲雀

秋の山鳴つて青空増ゆるなり

草の実に遠くからする鳥の声

零余子蔓引いてまもなく日の暮るる

ひよどりの騒いで日は日の昇るなり

鶉の声激しくて日の輝ける

きさきさが一番先に落ち景して

花石路にまた一人坂下りてくる

山茶花に夕日ますます傾きぬ

日をつみ動く雲あり枯桜

佐保光俊

遊覧船下る大川冬浅し

山茶花の向こうに声のしてゐたり

板塀の内外うちとに山茶花の散れり

大楠の畑うらつてゐたる時雨かな

時雨るるや町屋に明り点りたる

碎け散る落葉の舞へるハイウエイ

返り花峠に風の吹いてをり

露霜に触れつ結ぶ靴の紐

とどまりて底の暗さや冬の雲

月明り眠れる山を照らしたる

村上正人

ひよどりの桜紅葉を渡りけり

川土手に座れば紅葉散りにけり

今年またここに檀の木の揺るる

粗朶焚いて畑の隅の冬初め

御社の森に降りけり夕時雨

茶の花に朝日あふるるばかりなり

山茶花に明け方の雨降りだしぬ

見えぬほど道を覆へる落葉かな

重なれる落葉の下の水の音

満月を右に見てゆく冬の道

高尾ひとみ

兄弟の揃ひのスーツ七五三

顎かくす徳利襟の赤セーター

強霜の土を掘つたる土壺かな

大枯木花咲くごとくネオン巻き

冬耕の畑の小石掘り出して

着ぶくれて検眼の順待つてをり

八卦見を囲む乙女ら街師走

初雪のことから手紙書き始む

手を胸に心音を聞く雪の夜

水仙の丈の揃ひて咲きにけり

あざみ

弱りたるインコ見てゐる秋の夜

行く秋の鳥籠の鳥死せるかな

晩秋や死せるインコを手へのせて

箸置がインコの墓標秋の草

残る虫小学校の灯り見ゆ

紅葉晴小学生の長き列

子に肩を叩いてもらふ秋ともし

部屋に置く空の鳥籠冬日差す

ざくざくと野菜を切る子十二月

鳥の羽道に散らばる冬の朝

亜矢

茶の花や川の向うを列車過ぎ

水口に鯉のあつまり石路の花

泉水に赤く映りて冬紅葉

冬の蛇花から花へ移りけり

岩の間に細き流れの冬の滝

暮れかかる町に亥の子の声のして

ガレージの屋根にふれたる枇杷の花

冬の雲見つ点滴受けてをり

檳榔樹のそよぐ砂浜冬の月

早梅に細やかな雨降りにけり

敬子

また一人公孫樹落葉を踏んでゆく

分れ道落葉踏む人遠ざかる

海峡の色変はりゆく時雨かな

日の差せる方へと曲がり雪隠

短日や寄り来る鹿の眼の澄みて

冬の雨そは降るままに暮れにけり

山眠るバスは峠を越えにけり

冬菜畑夕日あまねく差しるたり

大雪の霽の上なる孫山かな

笹子鳴く石垣に沿ふ坂の道

晩子

台所柚子ころがしてジャムつくる

母が家の傍に小さな菊畑

中学生公孫樹黄葉の横帰る

一週間桜紅葉のすべて散る

綿虫のパン屋の前に漂うて

寒禽の竹藪のなか鳴き移る

満潮の河口に来たる鴨の群

鴨の鳴く川の向うに松並木

軒下の物干竿に大根干す

行くだびに冬菊を生け母の部屋

ちどり

草紅葉してゐる山の八合目

源流へ山毛櫸の黄葉の降りしきる

ひもすがら紅葉かつ散る門の前

柿紅葉畑の土に散りにけり

しぐれ雲近づく庭を掃きにけり

山茶花の咲いては散つて村外れ

杖挿して落葉の深さ確かむる

もの燃やす炎となりし落葉かな

しはぶきの聞こえて夫の帰り知る

窓越しの冬の日を背に紅葉飲む

松本恵和

山の道秋夕焼につぎたる

潮風に野菊はげしく揺れにけり

信号を見上げし空に後の月

山茶花の散り敷く道に鳥の来る

冬薔薇の固き蕾に日の差せる

冬の月庭の奥まで照らしけり

冬椿雀の群の飛び交ひて

落景道人の足音近くなる

冬木立ときをり鳥の来ては去り

臘梅の隣家の庭に香りたる

美耶

生涯の友より届く黒豆煮

七五三声の大きな男の子

鮪一匹母に倣ひて捌きをり

寒なまこ薄めに切りて一休み

湯気立てて句の短冊を書いてをり

師走の夜独り占ひしてゐたり

冬ごもり続けてゐたるストレッチ

新聞の我が句切り抜く冬の朝

静まれる凍滝を見る米寿かな

阿姫

大公孫樹黄葉を見上げ古稀迎ふ

麻雀の仲間が柿をくれにけり

鳶の輪が眼下にありて秋の山

石段の上に祠や柿紅葉

紅葉山行き合ふ人の静かなる

座蒲団に紅葉の散れる茶店かな

宮島の紅葉を添ふる穴子寿し

城山の九十九折れして落景道

庭先に木の葉の落つる音のして

井藤希

山茶花や隣の庭に花卉飛び

小春日の丘駆け下る園児かな

人影に岸を離るる鴨の群

寒菊や塵一つなき裏通り

坂曲がるたびに見えたる寒椿

新しき墓裾ゑられて藪柑子

真白き歯向うに見ゆる朝焚火

マフラーを巻いて玄喰蕎麦の列

新しき歳時記届く年の暮

栄吉

コスモスが右肩にふれ出勤す

珈琲館出でて見上ぐる十三夜

十三夜島から島に橋架かり

本川の流れの早し後の月

後の月広島城の堀深き

階段の上に玄閑茶が咲いて

茶の花の蕊のしだいに暮れゆけり

匂ひ濃き夜の落葉を踏みにけり

焼芋を天声人語包みけり

大橋博子

朝の窓開きしときの鴈の声

喪服着て母子帰りぬ秋日和

雨の夜のゆすつては酌む濁り酒

山茶花の垣沿ひに行く生家かな

山茶花や母に相槌打つてをり

夫と居て分け合うてゐる蕎麦湯かな

暮れ残る路地に見てゐる花八つ手

夕暮の川に魚影や年詰まる

シクラメン言葉少なき師と居りて

桑門わかこ

一輪の蘭の咲きたる笹の陰

改札を出でて歩ける刈田道

日当りの遅き溪谷紅葉散る

空近き枝より桜紅葉散る

切株の窪みに公孫樹落葉積む

橋脚の石組沈む冬の川

隙間風道路工事の音のせり

子らの声枯木の大きな洞にして

僧歩き渡り廊下の音牙ゆる

古井戸の中に浮かびし紅葉かな

残りたる歪な柚子の濃き香り

大樽にぎゆうぎゆうぎゆうと大根漬く

つがなく過ぎす感謝の冬至粥

手でぬぐひ窓から見たる霜の朝

大掃除終へて見上ぐる冬銀河

飯を炊く湯気に向うに冬の月

庭の隅寒竹の子の覗きたる

流水の流れつく浜冬日さす

セーターでチアガールなり鏡の子

マスクして息の循環する世界

底冷えのピアノ奏でる高校生

自転車の鍵を失くして暮早し

成人の日を待たずして髪を切る

シャッターを過ぎて洋菓子クリスマス

電話鳴る予感の距離は師走なり

非常口残像だらけの霜夜かな

極月の手紙あぐねて昼寝かな

新庄憲彦

友岡崇山子

ふじ女

母と手をつなぎ山茶花見てをりぬ

山茶花のひとつひらの散る日向かな

息白く洋館ならぶ坂くだる

海岸へ裏通り抜け花八つ手

日陰から落葉を分けて鯉の来る

着水の鴨の散らせる鳥の群

冬鳥の来て湖のざわめけり

落葉踏み龍頭の滝の前に立つ

冬耕のときをり仰ぐ伯耆富士

松田裕子

小春日の石のベンチに杖を置く

通学に息はづませる冬の朝

外灯のにはかに点り日短か

落葉掻く上手下手に分かれては

大屋根の瓦に並べ蒲団干す

帰省して母に頼める牡蠣フライ

真ん中に蜜柑の籠置く炬炬燵

寒苗机上に仕事残りゐて

睦みゐる老人と猫冬深し

森口良樹

姉の忌の念仏響く秋の寺

石榴の実生りし生家に兄独り

墓参る土佐寒蘭の咲ける郷

寒き日の指圧のあとの心地よさ

南天の赤き実にくる小鳥かな

除夜の鐘家族揃ひて聞いてをり

ことごと仕事なき日の大根煮る

球根を植ゑて楽しきチューリップ

大畑恵

仁和寺の紅葉の道のまつすぐに

冬の旅亀嵩駅に降り立ちぬ

新蕎麦の旗と並びて丸ポスト

新蕎麦の暖簾の外に並びたる

大根炊く隣ではがき書いてをり

門前の落葉を掃ける朝かな

注連張つて白き御幣にふれてみる

宮田保江

午前五時銀杏拾ふ大通り

高稲架の上に受け取る妻の稲

もらひたる鰯で作りし鰯大根

どの寺も掃き清められ除夜詣

除夜の鐘終はらぬ内の宮参り

初日の出東に二拍一礼す

英一

防寒のビニールを貼り北の窓

側溝の枯葉を集め水したたる

枇杷の花人に会はずに一日過ぐ

抜いてすぐ大根を炊く暮らしかな

カーテンの隙間に見ゆる霜の夜

冬ざれの畑を猪の荒らしたる

紀英子

幾艘もフエリーが冬の海をゆく

冬晴や城濠の鯉餌を食み

真夜中の耳の冷たき遊歩道

自販機の明りに触れる冬の夜

寂しさや二度寝を決める冬の朝

イブの夜の句会に足を運びたる

清水弘通

出張の土産はバナナと決めてをり

玉子酒かぜ口実にまた作る

毛糸編む縁の日差の早や翳り

年の暮昭和の歌がラジオから

独り居の気安さもよし日向ぼこ

独り食ぶ指先ほどの雑煮餅

白神陽子

青天をめぐりて落つる紅葉かな

短日の川面に明り映りけり

師走空とどろき残し貨車走る

地方紙を蜜柑に添へて送りたる

やす保

吊し柿食べつつ思ふ母のこと

暮早しそれぞれにつく家路かな

秒針の動き見てゐる十二月

遠藤さつき

道端にどんぐりあまた転がりぬ

冬の朝エンジン切れば雨の音

冬の風砂舞い上げて吹きにけり

かこ

日短かポストに届く喪の知らせ

短日の母の墓前にりんご置く

風吹いて肩に木の葉の舞ひ落ちぬ

上島康子

歳度もめくる歳時記日短か

北東に星の流るる年の暮

いつの間に水仙揃ひ伸びてをり

熊谷ゆり子

短日の家に戻りて灯をともす

強霜を踏んで進めるブルドーザー

初雪や朝刊に載る子の写真

高嶋絹代

はき替へて音変りたる冬タイヤ

街路樹の枯木となりし影映る

強き風窓枠揺らし雪の降る

民

蜘蛛の糸垂れて紅葉のぶら下がり

寒雀十羽ついでむ畑の中

息白く並んで買ひし宝くじ

ちかこ

玄関へ向かふ足跡霜の朝

着ぶくれて歳時記めくる夜半かな

冬日さす川辺の道を歩きけり

撫子

短日の買物を終へ戻りたる

霜の置く山の奥から鹿の声

冬夕焼父と競へる二重跳び

穂高

庭缺いつしか止みて日短か

霜柱踏んでは音を樂しむ子

冬夕日東の雲を樂めてゆく

みさ子

窓の外雀二三羽冬日和

粕汁にぶかりと浮かぶ油揚げ

掃除終へ窓から見ゆる冬茜

山崎桂子

こたつから顔出してるうちの猫

看護師の優しさ沁みる冬の夜

阿波久

オランダの運河どんより冬の旅

町内のポストに紙の注連飾る

津田玲子